

スペイン革命におけるCNT

(14)

ホセ・ペイラツ
今村五月訳

第五章 集産体（つづき）

セロス——住民三千。農業。畑三〇〇ヘクタール。アラゴン・カタルニャ水路は他に一千ヘクタールの多種の野菜と果実を潤していた。乾燥地——オリブ、はたききょう、穀類。運動が起きたとき、CNT、社会主義青年、POUMを基礎とする反ファシスト戦線がつくられた。自治体会議は九人の委員によって構成された。POUMの追放後は、CNT代表三人、PSUC三人、エスケラ三人によって自治体会議が構成された。村長職はCNTが担当した。

集産体は、反動的地主の有する広大な土地を接収した。同じく、農業組合事務所、映画館、工場、製油所を収用した。発電所、住宅、輸送は自治体有化された。CNTの発議によって、全生産分野を包含する集産体がつくられた。三六〇人の成員から成っていた。賃金は家族給だった。集産体員は、医療診断、薬剤、住居、電灯、燃料、野菜、を無料で利用できた。他の品物は共同倉庫で安い値段で買った。独身者は共同食堂を利用した。また衣料が支給された。結婚することになると、集産体は世帯を構える費用を支給した。共

同組合は非常によく補給されていて、配給制でない品物を、安い値段で、集産体員でない住民の大部分にも供給した。集産体の加入脱退は常に自由だった。共同体を脱退することになった者への賛成反対の問題の解決に関しては、紛争はほとんどなかった。社会的責任を果たさない者はまず戒告を受け、再犯者の場合は集会の審議に委ねられた。集会だけが除名を決定できた。集産体の学校は有能な一教授の責任の下に全住民に準備されていた。商業は他の集産体と交換条件で行なわれていた。生産物は相互の合意によって値段を決めた。貨幣による取引きはめったになかった。集産体は集産体地方連盟に加わっていて、それを通して相互の連帯と協力を行なった。人間による人間の搾取は完全になくなった。一九三八年三月二七日、野蛮なフアン・ヘ党員の侵入によって住民が疎開しなければならなくなったとき、集産体は、現金を金庫にわずかしか持っていなかったが、飼育していた羊一二〇頭、豚約一〇〇頭、肥沃な農場、牝牛三〇頭、役馬三六頭、脱穀機一台、石けん製造用のソーダ一五トンを有していた。集産体は独自の製パン所を持っていて、そこからしばしば住民の大部分に供給した。散髪屋、大工、馬具屋、かご

屋、その他、婦人服仕立屋一件があった。

マスロイグ（タラゴナ）——住民一八〇〇人。農業。大部分が畑地。生産物はぶどう、はたききょう、オリブ。運動が始まったとき、反ファシスト委員会をつくった。CNTのメンバー五人とエスケラの二人からなっていた。一九三六年半ばに、CNT分子と数人の共和党員と数人の他の無党派の者によって農民集産体を設立した。約四〇家族を擁していた。労働はグループによって組織された。労働証による家族給を受けた。それは消費組合で生産物と交換された。個人給は家族のない独身者にのみ支給された。収穫の少ない生産品は、病人以外には配給制で割当てられた。労働の義務は一五歳以上の男女全員に適用された。数人の子供をもつ母親にはこの義務はなかった。集産体への加入は全体集会で決定された。申請者が共同体に供出するものを何も持たなくても、問題はなかった。集会はまだ、不良集産体員に対する除名の権限ももっていた。集産体は仕事の一つに一人の医者を有していた。彼には、全共同体員を無料で診られるように、毎年予算が与えられた。予算には薬品も含まれていた。トレス・トリボ教授が学校で働いた。彼は集産体の会計係でもあった。やむをえない場合だけ貨幣取引が行なわれた。生産物交換が支配的で、そのための生産物の自然価格が常に大した障害もなく付けられた。戦禍によって住民は村を捨てなければならなくなった。集産体はその時最高の収益をあげていた。

モントブランク（タラゴナ）——住民六千人。経済生活は農業と盛んな商業だった。農業総面積は約五千ヘクタール（水田二五〇ヘクタール、畑三五〇ヘクタール、残りは川と山地と森が占めていた）、織物、アルコール、履物、皮革、ゴム製品の工場があった。農

業生産物はぶどう、穀類、オリブ、野菜、根菜、生果実、乾燥果実。一九三六年七月二〇日、地方政党员とCNTとUGTで反ファシスト戦線を結成した。自治体会議は同年二月までつくらなかった。自治体会議は各党あるいは組織から二人の代表が出て構成した。反ファシスト委員会は地方および村有の財産を接収した。アルコール工場も同様だった。村有財産は自治体有化された。靴、ゴム製品、織物の工場は集産化された。集産化は、社会主義者からほとんど協力を得られずに、CNTによって推進された。

農業集産体は一九三六年八月に結成された。五〇家族から成り、一〇家族はUGTに、他はCNTに属していた。集産化された耕地は五区に分けられた。各区に一人の責任者がいて、他の者と同じように働いた。毎日、評議会と五人の代表者が集まって、翌日行なう労働を組織した。集産体員の農民は、朝、事務所へ行って代表者から指示を受け、各代表者は彼らの責任のある仕事に必要な同志を選出した。灌漑の夜間仕事にはいつも志願者だけが残った。彼らは一日休養した。短時間休養に加わり、他の者といっしょに仕事に戻る者もあった。オリブとぶどうは農業協同組合に（二〇年来存在していた）渡された。残りの生産物は集産体の倉庫に入れられた。

賃金は家族給が基準になった。集産体は独自の貨幣をつくった。これで集産体員は消費共同組合の店で欲しい物や生産品を買うことができるようになっていた。ぶどう、オリブ、根菜、穀類、小麦粉、乾燥野菜は家族からの要求に従って大量に分配された。生産物の支払いには消費者の能力に応じて行なわれた。集産体は集産体の貨幣と国家の貨幣との交換を、それを必要とする集産体員の申請によって行なっていた。決まった労働の時間割りはなかった。集産体員

は原則として日の出から日没まで週六日働いた。祭日にはあまりくだわらなかった。何かの生産物が欠乏すると、集産体はそれを入力して、家族配給制で集産体員に分配した。集産体自体の生産物が欠乏した時には、同じ方式で、常に子供、病人、老人に優先的に分配された。肉体的に正常な者はみな労働適格者だった。家庭の面倒をみる一家の母親はこの義務を免ぜられた。この面倒のない母親たちはいつでも自由意志で自由な時間だけ労働に参加した。婦人に適した畑の手入れが必要な時には、多数の婦人が畑に出た。

集産体を作るとき、集産体員は各自の土地や馬や作業道具などを供出した。集産体員が供出した土地はそう広くはなかったで、各自の土地と、集産体への加入を望まない小作人や共同経営者や借地人が所有する同じ広さの土地とを交換することが行なわれた。交換のための土地があったときは、不和をさけるために相手に利するよう努めた。後から加入した者も同じ基準に従った。常にそうする用意があった。つまり、何も持たない者も受け入れられて他の者と同じ条件を与えられた。原則的に行なわれた接收では、物質的にも他の面でもなんの成果もなかった。その結果、集産体員たちは自分の持っている物、家内用の製品やセメントや肥料を供出することにした。何も供出できないということはなかった。第一回収穫までの期間、集産体員は誰も報酬を受けなかった。働いた仕事量は労働券によって累算された。収穫が行なわれたとき、各家族の勘定が清算された。最初に供出された種子や肥料の額も同じく清算された。この決算が終わってから、集産体は独自の手段で発展を始めた。

集産体をつくった時、物質的供出、すなわち労働用具、土地、等の目録がつくられていた。これは誰か集産体員がやむをえず、ある

の農場がつくられた。

集産体に反対する者は、必要な時に必要な仕事をして彼らを助ける働き手がいないために、困難に突き当たった。家畜肥料や殺虫剤の入手でも困難に遭遇した。それは、彼ら個人主義者たちを、播種や収穫のような類の仕事のためには一種の家族間の助け合いをせざるをえなくさせた。にもかかわらず、中耕に必要な注意が足りなかったために収穫は非常に悪かった。集産体に頑固に反対する者の間では、共同作業に加わろうとしないで、畜舎につながれている家畜までいっしょにして全部放棄する方を選ぶということまであった。

グラナディリヤ(レリダ)——住民約千人。経済的特徴は乾地農業(オリブ、野菜、はたきょう)で工業は稀少。製粉場一と製油所一。集産体は一九五六年九月にCNT分子だけを基礎にしてつくられた。集産体は三一家族、一五人の独身者から成っていた。計一五九人のうち、三八人は一四歳以下、一五人は六〇歳を越えていた。この年令の者には労働の義務がなかった。共同作業は四一〇人のグループを基準に組織された。収穫期には婦人も参加した。それ以外の時は婦人は除外されていた。農業委員会は四人の委員と各グループの代表とから成っていた。全体集会で指名され、労働の組織と指導とを任務としていた。夕方集まって翌日の生産計画を検討した。集産体には、集産体の仕事のために理髪屋一、左官二、大工一、鍛冶職人一、家畜商一、牧場番一、農場番一、園芸家二、馬手二、自動車運転手一、パン職人一、酪農技師一、仕立屋一(助手二)、学校教師一、がいた。生産物は管理評議会が直接管理した。労働時間は日の出から日没までだった。報酬はなかった。各人が能力に応じて働き、必要に応じて消費した。後に、各成員には個人的必要の

いは自発的に集産体を脱退しなければならなかった場合のために使用された。そういう場合、彼らの供出品は返済されるか、さもなければ決められた価格に従って支払われた。借地については、家族労働の能力に合った部分が返された。収穫の相当部分も、働いた仕事量に応じて返された。集産体員が死亡した場合には、その家族と家族の利益とは集産体によって保護された。非難に価するような不道徳なことは決して起こらなかった。

医療・保健事業は、教育と文化全般の必要と同様に、自治体によって運営された。貨幣なしに交換が行なわれた。交換された生産物は市場の流通価格を基準にして評価された。自治体との交換は国家の基準価格と貨幣とで行なわれた。外部との通商はある場合は貨幣で、他の場合は物々交換で行なわれた。連携関係がカタルニャ地方農民委員会(CNT)によって援助されていた。集産体は地方農業組合の中で大勢力を有していた。集産体は、CNTに属する単一組合の地方連合から出される決定に組織的に結びついていた。

集産体の土地の中には老化したぶどうの木のある所があつて、抜かなければならなかった。土地は新しく種を播くために耕された。一、二頭の馬で行なう耕作の伝統的習慣を破って深耕にした。その結果は次の収穫に表われた。豊作だった。開墾にめざましい成果をあげた二台のトラクターが、自発的に前線に送られた。結局、集産体化された土地の生産性は集産体化されない土地の標準に比べて著しく高まった。収穫から収穫へと進歩的活動が記録された。大収穫を予想して一台の脱穀機が購入された。約三ヘクタールの畑が菜園になつて、住民と前線の一部に供給するために園芸が強化された。また、農業の完成は必要不可欠であつたので、鶏、豚、その他の家畜

ために最少の金が保証されるようになった。それで、各人に週二ペセタが支給された。生活必需品やその他の品物の分配は共同組合によつて行なわれた。購入は貨幣を使わずに行なわれた。各人はどうしても必要な物を倉庫に依存した。不足している品物は配給された。配給制では子供、老人、病人が優先権をもっていた。一四歳以下の者は学校に通った。六〇歳以上の者は引退する権利があつた。妊婦にも同じ注意が払われた。病人は熱心に看病された。集産体は全員に一定の医療金を給付した。集産体員はみなバルセロナの人民病院(CNT)に登録していた。学校はかつて治安警備隊の屯所であつた古城に置かれた。夕方になると成人学級が開かれた。集産体はいくつ個の図書館をもっていた。個人、集産体、自治体、と、紛争もなく生産物の自由交換が行なわれた。集産体はいかなる種類の租税も払わなかったし、何らかの力でその立場を合法化することもしなかった。ここに集産体が遵守していた規約がある。

「本日、CNT労働者文化委員会は、総会において次に述べる規則を朗読し、共同生活と共同労働への道を示した後、これを承認するものである。

第一条 我々一同は、自由かつ独立の手段によつてみずから治め、同志の提供した土地とともに集産体で耕作されている接收地を耕作することを目的とする。

第二条 集産体は、これを構成する全同志の物質的精神的分野ならびに道徳的分野を擁護し、かつ告発するだろう。また、病人はみな、内科も外科もあらゆる面で補助されるだろう。

第三条 集産体内では、一八歳以上定年までの男女すべての同志が個人として参加しなければならない。

第四条 集産体は、できるかぎり広い方法で発展するために、数種の部門に分けられる。それらは、食料、建設、農業、養鶏、園芸、統計、牧畜、調理、の各部門である。計画にないその他の部門も加わりうる。

第五条 集産体は、供出があらうがなからうが、集産体への入を望む者はすべて受け入れる用意がある。続けて集産体に残ることを望まない場合、出る時には入った時と同じ状態になるであらう。

a 負債をして入った場合、その負債を集産体に払うこと。もし債権者になっていれば、その額を集産体の基金に払い込むこと。もし種々の理由で居残りを望まない場合、出る時には、集産体が彼に支払ったものは支払い、あるいは、明らかな手段で入金したものは払い戻しを受けなければならない。基金は常に存続しなければならない。彼は集産体のために経済的困難を引き起こしてはならない。

b 集産体は、集産体で生活する同志によってなされた負債の返済に三様あると考える。すなわち、

1 このために任命された委員会の予備調査で全負債が支払われる場合。

2 必要に応じて、また、労働から生じたものにに応じて支払わなければならない負債がある。

3 暴利と考えられ、あるいは、直接間接にファシズムを助けた人間に金を貸したために、返済不能となる負債がある。

第六条 集産体を構成する同志はすべて、機械、道具、全種類の野菜、農作物、手持ちの金、等、持てる物を集産体に供出しな

なければならない。

第七条 集産体は食堂をつくることになっているが、これは必要不可欠というのではない。目下一人で生活している同志のために食事をつくらなければならないからである。自発的に希望する者が食堂を利用していいわけである。

第八条 不可抗力で郷里を出なければならぬ同志には、集産体が必要な手段を提供し、彼のために必要な費用を支給するであらう。

第九条 集産体は満一八歳以上のすべての生産者に週二ペセタ、一五歳以上の者に一ペセタの補助金を設定する。また、個人的な雑費を考慮して、一八歳以上のものに一ペセタを与える。

第一〇条 集産体は、六〇歳に達した成員のために労働からの引退を定め、その上にすべての必要を支給する。

第一一条 病気のため定年以前に引退が必要と考えられる者には、例外的権利が認められる。

第十二条 この規則で予測できないことは、そのために召集される臨時集会で決定することができる。——グラナディリヤ町にて。一九三六年一〇月七日」

アラゴン諸州における革命

アラゴン地域は四七、三九一平方キロメートルある。全人口は戦前一〇〇万だった。アラゴン地域の四分の三は共和国地区に位置していた。六〇万人近い住民が、前線から数キロと離れていない所で社会・経済的な点で最も勇敢な実験を行っていた。コスタ（ホアキン・コスタ。「農業集産主義」の著書がある）の研究に現われる

農業集産主義は最初からここで現実の経験を得たのだった。約四五〇の集産体が、大地主や治安警備隊や国税の軛から解放された四三万三千人以上の労働者を抱えていた。ホアキン・コスタは農業集産体の最も情熱あふれる指導者の一人であるので、我々は、偉大な法学者が、歴史的な運命の道を歩むスペインを見ると、この彼の大きな幻想を夢みつつ、あるいは幻想から醒めて生きた町を、描写することから始めよう。

当時の現実が目覚めた精神をもつ社会主義者アラルド・プラツは、革命的運動の衝撃に胸をときめかせながら、後世に次のメッセージを遺したのだった。

「グラウスでは集産体制の下で住民の外見まで変わってしまった。この事実を認めるのは、驚きの大きいためにためらわれる。

観察者の胸中に疑問が湧くのである。一体、一ヶ月の間に、一国の労働大衆にとって単なる夢にしか過ぎなかったことが、幸運にも実現するなどということがありえるのだろうか？

広く美しい道。旅館、公共建築物は、看板に、集産主義の新世界の始まりを告げている。商人たちはともに共同組合で働く。散髪屋、大工、錠前屋、運送屋、草履職人、彼らはみな、共通利害の強い経済的紐帯と、共同作業に密接につながっている同胞関係によって結ばれている。

とりわけ良かったことは、カシケが追放され、村民の運命に対するその影響力がゼロになったために、職業上の競争と羨望を消すことができたことだった。それらは個人主義体制にあっては全てをにがくする塩でしかなかったのだ。例えば、洋服屋があった。ここでは同業者間にそうしたことは見られなかった。菓屋や

散髪屋についても、主人や薬剤師に同じことが言えた。すべての商人の間の競争がなかったとは言わない。しかし、これらの害悪は集産体の規則を実践することによって消去された。かつては互いに利害の対立していた者が、今では労働における兄弟となった。集会では種々の組合の代表者が嫉妬も羨望もなく同じ考え方をもっているのがわかるのだった。同じことが百姓にも牧畜業者にも鍛冶屋にも医者にも見られた。みな、働いて食べた。みな、同じように必要を満たされていた。

集産体の製鉄場。集産体の衣料品屋。集産体の飲食店。集産体の製粉所。

このように、村民の物質的・道徳的・精神的な表現が集産体のすべてに与えられていた。労働は分担されていた。各組合が集会で各集産体員に仕事を指定した。これら組合集会は議論のつぼだろうと考えられるかもしれない。だが、ほとんど議論はなかった。なぜなら、各自が自分の義務を知っており、決して逃げようとはしなかったからだ。

六〇歳以上の者は労働の義務から解かれていた。最初のうちは、これら人生の落日にむかいつつある者らは青年の果敢さに比べて静かに歩んでいた。青年たちは大人の遵守すべき規則としての集産体の規程を定めた。老人たちが年齢に余る労働に不平を言うようになるのを恐れてであった。それが誤りであることはすぐわかった。老人は働くべきでない。これは集産体の初歩的な規程の一つだった。かなりの者が顔役やカシケの笞と圧制の下で一生を働いてきたのである。老人はまた、生産物の大部分ではなくほんの一部分が自分のものになるだけの辛い労働にこれまで一生捧

げてきた余命を浪費するべきではない。こうして老人たちは集会で働くことを決定した。他の集産体の厄介者にならないためにも、近隣の村の生産の先頭になって農民をその後進性からたち上げさせるためにも、働くことが必要だった。戦争の勝利を保証するために、グラウスの老人たちは年齢や肉体的事由を障害と考えることができなかった。そしてグラウスの老人たちは本物の感動的な戦闘部隊を作った。村民はそれを『インターナショナル部隊』と命名した。

老人は隊伍を組んで野良に出、仕事の競争をやった。貧しい者にとつては夢のような暮しだった。彼らこそ集産体の最も確実な防衛者であった。

川辺の菜園であぜに腰を下ろしてこれら尊敬すべき老人の一人は私に語った。――万事うまく運んでいればよく見えるものだ。ここでは、この集産体制ではごらんの通りさ。

実際、見る目聞く耳がありさえすればいい。集産体の驚くべき発展はたやすくわかる。集産体員は土曜日ごとに集産体の中央金庫に行つて署名して金をもらつた。集産体の共同作業者たちは生活必需品をもらつた。貯蓄増大と近隣からの購買力の増大のおかげだった。

集産体員が結婚することになると彼には一週間の休暇と現金と家が与えられた。家屋も勿論集産化されていた――そして然るべき共同組合を通して家具が提供された。その金は時がたてば何の困難もなく返済された。集産体のすべての公共事業が必要に応じて提供された。人が生まれてから死ぬまで、集産体は彼を保護し、権利と義務を守り、また、彼自身民主的に集会に参加した。

集産体の書記長、ポルテリヤ同志は私を統計部に連れていってカード整理箱を開けた。私に何か必要な住民全体の労働の記録と生産量を教えるためだったが、私は危うく気絶せんばかりだった。グラウスの集産体組織にくらかも似た、もっとよく機能し、もっと有能でゆきとどいていて、数字の厳密な職員がいるものだろうか。こう言うのを疑う方には、私は、土地に関するその絶対的正確さを自分で確かめてみるよう慎しんでおすすめる。

すべてが系統的に組織されている。各生産部門はその発展と一日当り、一時間当りの生産性について正確なデータを有している。こうして冗費の全くない確実で実際的な整頓の最高点に達している。あらゆる面におけるこの系統化の厳格さなくして、グラウスの集産体が実現したような巨大な再建事業を遂行することができたのだろうか？

おかげで村の傍に養豚のためのモデル飼育場で建てられた。年齢と種類の様々な家畜約二千頭が収容された。周知の通りアラゴンではスペインの他の多くの地方と同様、家計の基本要素の一つである豚の屠殺は最も古くからの世襲の家族的掟である。

冬が来るとグラウスの住民は各自一頭の豚を越冬の元手として受け取る。養豚場は最も近代的な設備をという要求に沿って建てられている。家畜はシャワーその他飼育の科学的処置に必要なあらゆる配慮を受けている。私は養豚場の世話をしている同志やそれを建てた同志にどこから模範を取ったのかたずねた。彼らは大したことでもなさそうに、この事業を始める時、種々のモデルを慎重に研究し検討した、そして最後にシカゴの養豚場と同じ合衆国のモデルを選んだと答えた。

生産部門の異なる組合間における不一致などは決して起きなかった。集産体員はパンや労働や人間の発展と完成の手段やを十二分に享受していた。

子供たちは集産体の最大の注意と不断の世話の対象だった。どんな理由や口実があつても、一四歳までは決して働かせられなかった。かつては生まれた家庭の貧困の故に卒業前に学業を捨てなければならぬのが当たり前だったような、そういう家族自身による子供の搾取は終った。母親、特に母親にならうとしている婦人たちは、とりわけ妊娠中は特別の待遇を受けた。

娘たちはみな縫製工場で働き、戦場や宿営地の戦闘員のために服を作った。グラウス全体が、近隣に労働と休憩の時間を告げる鐘に導かれる労働と献身の人々の巣であった。

ここに列挙した事実の全体から、我々が問題にしている純粹に自然な体制というものは長続きできない、結局は以前に輪郭の描かれた共存体制になつてしまふのだと、推論されるかもしれない。しかし、そんな危険な反動をたきつけるような者は決していないのだ。なぜならそんな材料はあるとしてもごくまれなのだから。

この体制、生活と共存と統制経済の体制は、既存の組織を土台にしたものではなく、技術的な方法によく合致したものだ。私は数時間、集産体の生活の多様な面の源である役場の構造を調べた。

地域経済の全分野はその初期の規模と発展中の規模と発展の可能性において研究されている。しかし、いい加減な手順ではなく、最も厳選された統計の要求するところに従つてである。

村の外の別の場所にもう一つの養鶏場が、組織の有能な訓練所、実験所として建てられていた。広い敷地は以前の畑と庭を全部占めている。極めて多種の家禽類が養鶏場の仕切り部屋の中で騒いでいる。一〇万羽近くが次の秋頃には完全な収益を上げると考えられる。現在養鶏場の鶏小屋は七万羽を収容している。鶏小屋は全部新しく素晴らしい。全部、技術とこの技術の経験の最も厳しい要求に沿って建てられた。養鶏場の管理人はこれまで知られていなかったものより大きい収益をあげる孵卵器を發明した。数千のひなが暖房付きの部屋の中で騒いでいた。数百のがちようとあひる。数百のひなと親鳥が注意深く選別されている。養豚場と同じく奇跡の養鶏場である。アラゴンの全地方が模範になっている。グラウスはアラゴンの労働者にとって巡礼の地であり、我が祖国の経済的再建の学校である。

有能な創設者たちはみな住民の間で不眠不休の働きをしていた。彼らの学校――ホアキン・コスタという名前だった――と、学問系統の最も多様なテーマに関する最も近代的な研究を内容とする小冊子を収めた図書館とが開設されていた。集産体は印刷所と書庫を持っていた。

工芸・職業学校が作られた。そこには土地の六〇人以上の青年が学んでおり、あらゆる工芸と職業の様々な技術を習得させられた。美術工芸・職業学校の同じ建物の中に、美術の歴史的価値のある物と同じく絵画・彫刻作品と木彫の陳列館がつくられた。

グラウスは、村の近くの広大な庭園をもつ大宮殿に建てた難民の児童と教師の居留部落の必需品を、ほとんどまかなつていた。マドリッドや下アラゴンや、その他ファシスト戦線に近い地方の

戦闘地帯から来た男女約一〇〇人の子供を親切に世話していた。五〇人以上の難民を抱えていた。

アラゴン全村が戦争物資のあらゆる必要に率先して応じている。道路が整備された。その地方の石炭や鉄鉱の豊かな地帯の開発の可能性が研究された。完全に正常な経済的基礎で工業は最大の収益をあげていた。最も近代的な設備をもった新しい製粉場がたてられた。近代的な農業機械が購入された。その中で最新の脱穀機が一等群を抜いていた。牧畜の利用が工業化された。要するに、集産体員の規範を通して、住民生活は変えられ、同じ地方の全住民の生活をも変えつつあるのである。革命はなされた。

彼らは話してくれた。七月一八日の陥落後、国家の再建と修正とに先立つ混乱が確かにあった。そして我々が国家の特別税のために充当しなければならない税金が財務省から徴収されることになった。集産体の金庫ではグラウスの住民が支払うべき金が計算されていた。これでわかるとおり、我々はあらゆることを考慮に入れ、あらゆることに先んじた。我々は徴収に来るのを待ちかまえていた。

グラウス集産体の建物の看板の中では、銀行があることを教える金色の堂々とした文字板が花形選手だった。銀行は営業してなかった。その仕事は集産体の中で活発に行なわれていた。コミュニティの金庫によって外部とのすべての取引が行なわれた。信用は無敵だった。確かに、戦争と革命の初期には考えのない破壊的グループによって銀行機関の書類がいくらか焼失したが。

後になって、グラウスの住民と商業関係のあった他の地方の商

店や工場は、集産体員の隊伍に加わった村の住民に負債の返済を要求した。要求の正当性が認められて、集産体は、集会を通して、決して革命的でない、しかしグラウス集産体住民の高貴と誠実の精神を示す、はつきりした命令を出した。

集産体の一員が署名したこと、アラゴン人の約束と署名に、集産体の同志の連署がつく。全員の名声のために多くの事がそうされた。要求を受けた集産体員は、決して詐欺などしないで、やがて負債を返済するだろう。かくもこの村の集産体員は素晴らしいのだ。七〇〇人のうち一七〇人以外はすべて集産体員である。

アラゴンの多くの集産体がそうである。しかしながら、グラウスの集産体ほど完全な水準を示している所はないと正しく言わねばならない。他のものは秩序と繁栄のうちにグラウスに接近しつつある。ビネファル、ベナベレ、バルバストロ、アインサ、エスプルス、アングエス、オンチネナ、アルカニス、イハル、プエブラ・デ・イハル、ラ・ナハ、ポリヤルエロ・デ・モネグロス、フラガ、モンソン、その他多数。生活および経済生活の全部門で完全に集産化された村は三五〇である。他のものには集産体と個人主義者が混合体制で共存している。純然たる農業と牧畜業の集産体が圧倒的である。アラゴンの大工業は共和国地区でもモンソンとプエブラ・デ・イハルの製糖工場に限られている。そこでは労働者の指導の下に（生産管理）闘争が正常に行なわれ、この闘争に関連して大きな生産量をあげた。

同じことが製油工場でも起き、その生産は、集産化された組織のもとに、農業および牧畜業の富を利用する小工業とともに完全な正常さで発展した。」

モンソン（ウェスカ）——住民六千。農業。旧水路による水田

一、二〇〇ヘクタール。残りは一五、〇〇〇ヘクタールまでアラゴン・カタルニャ運河により灌漑。製糖工場、製粉所、石けん製造、オリブ搾りとオリブ殻の製油のための数個の設備。作物は砂糖大根、隠元豆、そら豆、小麦、大麦、紫うまごやし、野菜類。農業と他の数個の職業の集産体がCNTにより創設される。製糖工場は社会化された。UGTは建設業部門を社会化した。約八五家族と数人の独身者が集産体を構成。計約四五〇人。生産品は集産体の一定の地に集められた。余剰は集産体地方連盟を通じて交換された。決まった労働時間はなかった。季節によって九時間、一〇時間、あるいはそれ以上働いた。他の職業でははつきりした労働時間はなかったが、ある秩序が保たれていた。家族給が次のように定められた。独身者五ペセタ（域内通貨）、既婚者九ペセタ、子供一人につき三・五〇ペセタ、一四歳以上家族として生活している場合四ペセタ。分配共同組合は次の部門からなっていた。肉屋、パン屋、衣料品屋、靴屋、穀物屋、その他。配給は家族通帳で行なわれた。既婚婦人は臨時労働が緊急の場合だけの労働についていた。独身婦人は作業場や共同組合や他の施設で働いた。

集産体は正常に発展した。食品や衣類や履物、要するに生活必需品には決してこと欠かなかった。土地は最良に耕作された。機械が牛馬や人間の筋肉労働にとってかわった。個人主義者は以前と同様に仕事を続けていた。彼らは補給に困った。仲介業は廃止されたので補給は自治体を通さなければならなかった。彼らに対して厳しくはなかった。困っている時には彼らに脱穀機が貸し与えられたし、一定の品物まで便宜がはかられた。モンソンにおいてと同様、他の

地方でも集産体が組織された。そこで、ビネファルを所在地とする集産体地方連盟がつくられた。連盟の倉庫に集産体員は余剰生産物を持ってきて、代わりに、貸方借方を問わず必要なものを持っていた。連盟は病院を設置した。それは全集産体員に自由に利用された。

アルコレア・デ・シンカ——住民約二千。農業。乾燥地九千ヘクタール、水田一、一〇〇ヘクタール。作物は野菜類、果実、乾草、穀類。運動の初期の間にCNTは共和党派といっしょに住民総会を召集した。そこで自治体管理が決定された。雇用労働なしに自己労働で生産すると約束した所有者以外は、全生産財と生産手段を社会化することが決定された。しかしながら、集産化の事業ではCNTは独力で働かなければならなかった。農業集産体が建設され、これに鍛冶屋二、大工二、以前の散髪屋三の職人が加わった。集産体は小さい晒工場、幼豚三頭をもつ養豚場、牛馬八〇頭をもつ飼育場を作った。また羊三〇〇頭ももっていた。後に集産体は脱穀機、トラクター、貨物自動車各一台を購入した。

集産体は一九三七年七月二八日まで正常に機能していた。その日、第二七大隊（カール・マルクス大隊）の「コンソモル」部隊によって解体されたのだ。その時数人の集産体員が投獄された。集産体は再建された。最後には集産体は四〇家族になった。労働は各作業の代表者の技術的責任の下に、地域と班によって組織されていた。代表者たちは労働時間外に意見を交換しあった。彼らは労働に日々努力を傾けた。必要に迫られた時には全体集会が開かれた。生産物は集産体員に分配され、余分は利用されない物との交換のために倉庫に残された。集産体のパン屋が全人口をまかなっ

た。必要と考えられる時間働いたが、一日一〇ないし一二時間を下らなかつた。最初集産体員は日当を受けなかつた。能力と必要に応じて働き消費した。後になって配給券で支払われる一種の給料ができた。公貨は集産体員の間ではほとんど通用しなかつた。公貨があつた時は、給料は個人給だつた。集産体共同組合は住民へのすべての供給にあつてた。

集産体に入る時には（それはすべての隣人に対して完全に認められた権利だつた）、加入者は個人財産である土地を生産物や道具や役畜といっしょに集産体に供出する義務があつた。自発的に脱退する時にはこれらの供出物は彼のものとして認められた。子供の教育と衛生上の配慮は集産体の根本的義務だつた。それらの業務はほとんどすべて貨幣なしの交換によって行なわれた。レリダの工業品の商人たちはある期間これに融通を利かせたが、後に交換を拒否した。しかし、全般的状況から貨幣価値が下落していくにつれて、再び立場を変えて商取引よりも交換を望むようになった。集産体は決して国家に納税しなかつた。だが、前線へ、侵略者と戦っている兵士たちに向けてしばしば食糧を送ることは、神聖な義務だと心得ていた。

ベニャルバ——住民千五百。CNTは一九三一年から村に存在。経済的特徴は農業、牧畜業、手工業、小商業。畑作物は小麦、からす麦、裸麦、ライ麦、ぶどう、オリブ（甚少）。蜂蜜、羊毛豊富。運動が始まつた時、革命委員会が村会に交替した。この委員会の一部は全生産部門の直接の代表者が構成していた。労働は班と班代表によって組織された。集産体は最初からシムカの臨海地帯の村々との生産物交換を行なつた。例えばコルムナ・ドゥルティ村とのよう

に。この村への補給は運動の初期から行なわれた。最初集産体は村の全住民を抱えていた。後にアラゴン評議会の滅亡の時、再建されることになった。その時五〇〇人が参加した。残りの者は彼らの個人財産、土地、牛馬、耕作道具を要求した。集産体員と個人主義者からなる委員会が公平に分配を処理した。

農業部門はいくつかの作業班が分担しており、それらは穀物やぶどうの耕作を分担していた。そのメンバーの一人は交替で集産体の運営委員会に代表としていた。車庫をもつ輸送部門が作られ、あらゆる種類の農機具の修理場が三つ作られた。建設部門と大工部門は非常に重要だつた。集産体は彼らの戦傷者の再就職を平等に世話した。娘たちの経済的職業的指導を目的として、衣類製造の学校と作業場がつくられた。この衣服と履物の職業は以前村にはなかつたものだつた。搾乳場建設も新機軸の一つだつた。脱穀機用のモーター二基が映写機一基とともにバルセロナから運ばれてきて、後者は教会に据えられた。収穫物はすべてそれぞれの倉庫に貯蔵され、集産体内の需要に必要な量が計算され、残りは近隣の村や州との交換にあてられた。大量の羊毛刈りにはテルエルの職人の手を借りるのが常だつた。戦争の困難によって集産体員たちはこういう種類の仕事を始めなければならなかつたが、それを完全に行なつて隣接の村々の需要に供したのだつた。集産体は公共事業と隣人すべての生活条件の向上に差別なく大きな注意を払つた。

すぐに貨幣は廃止された。後に家族給が実施されたが、常に家族数に比例して減少するのを基本にしていた。各家庭は毎日規定の俸給に従つて食糧その他の品物の配給を受けることができた。できなかつた時には次の日に、種々の理由によって時間内に受け取れなかつた。

つた物を要求することができた。実験の結果、不良集産体員による乱費が起きた。彼らは原則を無視し、不必要なものをその日に要求して結局使えなくなってしまうか、金を蓄える目的で必要物を要求するようになった。多数の者にとって蓄積を食いつぶすことができるようにしておくことは、不必要な品物を蓄えざるを得ないよりももっと危険なことと思われた。その結果、翌日のためにその日に使われない分の俸給を調べることでできるよう決められた。そして、年末にもし当事者が彼の貯蓄を使いきつていなければ、相当する物を共同組合から受け取ることができるし、町から来た嗜好品を求めてもよいのだつた。ところが、貯蓄は使い果たされていた。集産体員らはこうすることによって新しい金持ができるのを避けようとしたのだ。

水、牛乳の供給、散髪のは、映画館や劇場に入ると同様、俸給から引かれることはなかつた。医療と保健の事業についても全く同じになされた。家畜に必要な飼料も無料だつた。後になって共同養鶏事業が始められ、そのために孵卵器が一基購入された。配給は子供と老人を優先的に、と言うより医者への処方にしたがって行なわれた。集産体員は一四あるいは一六歳から働く義務をもっていた。女子の労働は自由だつた。しかし彼女たちの大多数は適当な仕事に協力した。新婚者はみな集産体から家具をもらつた。医師、代診医、薬剤師、獣医も、他の集産体員と同じ権利と義務をもつて集産体に加わっていた。医師は保健部門の責任者として運営委員会に入っていた。薬局は共同組合の支部だつた。非常の場合のためにレリダの病院と契約してあつた。

最初は何となく直接交渉が行なわれていたが、後には集産体地方

連盟を通して、さらに後にはアラゴン評議会を通して行なわれた。七月一九日以前の価格に従つて生産品の値が建てられるようになった。しかし工業の中心地では生活費は急速に上がり、農産物は値上りしなかつた。その結果、政府筋、あるいは思想的に隔つたある種の企業や部門との取引は、すべて結果的に不当な不利益をこうむつた。

集産体はその分子たちのねばりのおかげで一九三七年夏の共産党部隊の弾圧にも生き残つた。リステル部隊との協力によって回復したファシスト所有者によって活動を縮小され、最良の土地を奪われながらも、アラゴン戦線の崩壊の瞬間までその事業を続けたのだつた。

グラナロータ（ウェスカ）——住民六百の村。農業は小麦、大麦、オリブ、はたんきょう。運動以前はたつた五人の大地主がいただけだつた。運動の最初にCNTとUGTを基礎とする自治会が設置された。一九三六年八月上旬、農業集産体が設立された。UGTは初期には参加した。後に三七年五月以降、集産体は連合の二三家族すなわち約百人に縮小された。ほぼ八〇ヘクタールの土地が集産体員によって大地主から接収された。労働は八班を基礎に組織され、各班の先頭には代表者がいた。労働時間は不定だつた。一四歳以上は労働可能とされた。それは同時にすべての権利と義務への扉でもあつた。貨幣はなかつた。集産体員は個人としてあるいは家族として通帳をもっており、それには労働時間と消費量が記入されていた。消費共同組合があつた。パンや野菜のような物は配給制度なしに供給された。肉は生産者一人当り一ポンド、ぶどう酒は一リットルだつた。

集産体への加入には、加入者の全財産を集産体に渡すことが要求された。集産体を離れる時には提供物はすべて返された。脱退者が一年以上集産体にいた場合には、これから一五パーセントが差し引かれた。医療―教育事業のような集産体員の費用はすべて集産体の責任だった。集産体は集産体地方連盟を通じて活動した。国庫の代弁者の圧力や脅迫があったにもかかわらず、国家には絶対に納税しなかった。

アルカニス（テルエル）——住民八千。運動の最初から大地主から接收した土地を集産化した。集産化は輸送にも及び、初期にはUGTも参加した。村有財産は自治体所有になった。集産体は映画館二、搾油機九、製粉所三、発電所一をもっていた。農業部門は五百人の労働者からなっていた。一日九時間労働と一人一〇ペセタの日当が定められた。共同組合が教会内につくられ、そこにはあらゆる種類の品物、履物、石けん、かん詰、腸詰、服地、砂糖、小麦粉、などが山積されていた。貨幣は引換え証によって代行された。自治体評議会はCNT代表六人とUGT代表六人によって再組織されていた。

カランダ（テルエル）——住民四千五百。農業と牧畜業。これから派生する工業、すなわち製粉、石膏炉、製陶とモザイク、の三つの工場。一二の搾油場がシーズンの四カ月間活動。オリブ殻の搾り油の化学薬品。作物はオリブ油、桃、りんご、小麦、羊毛。接收された主たるものの中には、モンソン伯でモンテ・ゲレロ侯のホアキン・フォルトン、ミゲル・サンチョ・イスキエルドとその兄弟、マツタノ、カサノヴァ、サウラス、クレスポ、ガスカ、ルサレタその他の人物のあまり重要でない別荘があった。集産化はほと

んど全面的に行なわれた。にもかかわらず、集産体員と個人主義者（後者は小商人）は完全に調和して生活していた。農民は一〇人の班で地域別に分割された土地で働いた。各グループには代表者がいた。集産体は約三千五百人のメンバーを収容するようになった。トラクター、刈取機、脱穀機を備えていた。人手不足のため猛烈に働いた。五百人以上の青年が、大多数は第二六部隊で戦闘の前線にいた。自治体評議会はCNTとリベタリア青年団の分子から成っていた。彼らは活動を大いに前進させた。貴重な図書館と公衆浴場がたてられた。合理主義的學校もたてられた。ここには一、二、三三人の子供が通った。それは古い僧院に建てられており、一〇人の教授が働いていた。集産体は最も学業の進んだ生徒たちの学費を負担してカスベの中学校に送った。貨幣は廃止され、一種の引換券がとって代わった。多くの必需品と公共事業は無料だった。他の村およびバルセロナの織物工場との交換が行なわれ、外部から得る必要生産物の代わりにオリブ油を供給した。

アルコリサ（テルエル）——住民四千。うち集産体員三千七百。農業は小麦、オリブ油、野菜。集産体は古い僧院に搾油場を建てた。また靴工場も建てたが、これは莫大な利益をあげた。仕立て工場は住民の必要を満たすようになった。映画館と図書館と六百人の子供を収容できる學校があった。一二人の教授（五〇人の生徒に一人）がいた。生産物の分配は引換証か消費カードによって行なわれ、ある種の生産物の引渡しは、適時の方式によって行なわれた。最初から商取引と交換活動が行なわれていたが、結局、近隣の衛生事情の向上と住民の生活水準の向上をもたらしした。

マス・デ・ラス・マタス——住民二千三百。集産体員二千。残る

三百人の個人主義者も集産体の店から買っていた。そこに彼らは口座を開いて、彼らの生産物を納入した。集産体への加入は自由で、集産体制の反対者に対する圧力は決してなかった。中央政府の処置によって財産保持を許されていた所有者たちのある者は、彼らの工場を自発的に寄附して他の集産体員と同じく新体制に加わった。

オリエテ（テルエル）——住民二千二百。ほとんどが小地主。集産化は村の大部分に及んだ。集産化された土地は地区によって分けられ、労働者は労働の班によって分けられた。村の主要な資源はオリブ油で、それをもとに活発な商業活動が行なわれていた。貨幣はただこれら商業活動と交換のためにのみあった。教会は食料倉庫に使われた。教会の中にはまた栄養食物の工場がたてられた。集産体の事業の中には石炭の鉱床の発見と開発があった。集産体の委員会が自治体評議會を代行した。古い庁舎はリベタリア青年団によって学会と学校と図書館に変えられた。集産体員と個人主義者の関係は正常で、次の決議によって統制されていた。

「一、委員会は、諸組織との合意によって次のことを決定する。集産体の中で不満な者は自由に脱退し、かつ個人的に自分の所有地を耕作することができる。ただし、個人の努力で耕作可能であるより以上の土地は何者も所有できない、また互いに助け合うことはできるが、その助け合いにはいかなる時にも人間による人間の搾取があつてはならないことを警告しておく。

個人主義者たちは集産体に反対する仕事をするをつつしまなければならない。さもなくば反革命派と見做されるであろう。

二、集産主義者たちは個人主義者を尊重しなければならない。二つの組合本部、CNTとUGTの活動家たちは、彼らの共通根

が集産主義であることをよく考慮し、集産体の利益のためにでるだけのことをしなくてはならない。

三、集産体員と個人主義者の間に存在すべき関係。集産体の共同組合は各個人主義者に対して彼に渡した品物の金額の当座勘定を開く。これによって彼ら個人主義者は共同組合にある在庫品は何でも仕入れることができる。ただし集産体員にはそれは必要ない。

個人主義者の家畜は常の如く若木を大切にしながら村の領内のどこでも放牧してよい。個人主義者各一人が持てる家畜の最大数は二五頭と定める。牧地を大切にすることも彼らの義務である。

戦争やここでの必要によるオリエテ内の家畜の減少分は、次の方法で集産体に提供された家畜に比例して割引かれる。ここにいる家畜は上、中、下の三種類に分かれると考える。そして彼らの相当するものが、この三種類あるいは三クラスから、公けに比例分配あるいは按分分配される。

最も興味ある点の一つは節約を監視することなので、個人主義者に属する家畜は自治体評議會の二人の委員によって統制されるだろう。二人とは、すなわち、UGT出身の衛生委員とCNT出身の牧畜委員である。

集産主義者が彼らの耕作した土地から収穫した生産物に、もし不良品や妨害行為が発見されたら、委員会はこの二人は、妨害した個人主義者を彼の判断で裁くことができる。

五、組織の浄化。この二組織の浄化作業はUGTの同志四人とCNTの四人の共働によって行なわれる。彼らは集会によって指名された者である。」

アラゴンの農業集産体連盟

一九三七年二月中旬、カスベで集産体会議が開かれた。五百人の代表者が出席した。この会議でアラゴン地方農業集産体連盟の結成が決定された。ここに可決された規則の完全な原文がある。

「規則」

一、農業集産体連盟の名で、集産体に組織されている労働者の共通利益を守ることを使命とする共同組織がアラゴンに設立される。

二、当連盟の性質。

a 相互援助にたつて集産主義の利点を強力に宣伝する。
b 土壌の質があらゆる種類の種子の播種に適するような場所建設されるはずの農事試験場の管理。

c 技術実習をしたい青年を、その特殊性に注意して建設される技術学校によって世話する。

d 種々の農業労働に関する労働に最大の収益をもたらす方式を、アラゴンで調査する技術班の組織。

e 交換条件を常に目標としながら、域外における商業的発展を探る。

f また、統計による域内生産の余剰の調整を通して、域外との商業活動に従事する。従って、常にアラゴン地方防衛評議会と協調しながら、連盟の集産体の全必要に對して抵抗力のある金庫を備えることは義務である。

三、文化面で、この連盟は常に参与する。

a 集産体に、娯楽として役立つと同時に全般的意味におい

て各人の教養を高めるようなすべての普及手段を用いること。

b 映画、演劇、その他可能なかぎりの宣伝手段を講じるとともに、農民の新しい地位の完成と確立を目的とする講演会を組織する。

四、定めた事をすべてよく実行するために、連盟は次の職務からなる集産体地方委員会を設ける。総務、記録、会計、財務、庶務二名。

五、総務は委員会の運営、公認証類の検印、集産体が提出する全文書の処置を任務とする。記録は、連盟の委員会が開いた会議のすべての記録をつくり、総務不在の時は臨時にその業務にたずさわる。会計は、地区委員会が入れる預金に当座勘定を開き、集産体の簿記を行なう。普通、決算は財務とともに行なう。財務は連盟の資金の保管と、前もって財務と会計の署名を受け、事務局で証印をもらって提出される請求書の支払いに当る。庶務は、例えば宣伝、統計、技術的相談、等々、連盟内部の発展のために必要な種々の部を設置する。

六、この連盟は、連盟として業務を行ないながら、集産体のよき発展のために必要と考えられる地区連盟を組織する。これは、自治体評議会、アラゴン地方防衛評議会と相互に誠意ある関係を維持する。

七、集産体員の供給活動には配給券がつくられる。

八、農業集産体およびその補助的集産体の地方連盟は六ヵ月毎の定期会議と、さらに適当と考えられる臨時会議を開催する。

九、定期会議の都度、連盟の委員の半数が交替される。

一〇、集産体連盟の委員会はカスベに置かれる。

一一、この地方連盟創設後に加わる集産体はすべて、同連盟に加入するためには、申請する集産体の同志が総会で同意することにも、それに関する記録作成と必要な承認とのために、地方委員会に記録の写しを送付しなければならない。

一二、これらの配慮が実効をもつよう、集産体はこの規則の定めるところを遵守しなければならない。

一三、この規則は身分証明書に印刷されて加盟各集産体員に配布される。

一四、この連盟が開催する会議や大会で決議されたことはすべて、この規則に予め入っていないまでも、有効性をもつ。」
同会議で採択された見解のいくつかをここにあげる。

「第四点に関する見解——農業集産体地方連盟の機構に関する議事の第四点について検討するために会議によって選出された委員会が起草し、広く意見を交換した後、我々は会議の意向に沿った次の見解を採択する。

一、当地方の経済力を総合するために集産体地方連盟を設立すること。また、答申にある自治と連帯の原則に従ってこの連盟を強固にすること。

この連盟を組織するに当り、我々は次の原則に従う。

a 集産体は地区ごとに連合しなければならない。

b 地区委員会の統一と統制のために、その間に集産体地方委員会を設置する。

連盟の内部構造——一、集産体は各地区委員会に送る正確な生産と消費の統計を作成する。そして地区委員会は真の人間的な連帯を確立する唯一の形態である地方委員会に、地区の統計を送る。

貨幣——一、集産体内部では貨幣の流通は廃止されなければならない。その代わりに配給手帳を作り、内的な必要のために相当額を集産体の手に残しておくこと。

二、地方委員会が輸入に関して集産体の補給状態を注意できるように、地区集産体あるいは委員会は、地方金庫を設置するために、各地域あるいは地区の財産にみあった額を地方委員会に提供する。

第五点に関する見解——本案提出者は土地管理の組織的な新形式であると信じる方法を会議の考慮に委ねる。

我々は自治体を承認する。なぜなら、これは今後住民の財産を管理するために役立つからである。

地区によって連盟する我々集産体員は、我々が耕作する土地の地域の境界を廃止しようとする。そのためには会議は次の諸点に同意することが必要だと考える。

一、集産体が地区連盟になるなら、これらの管理機関の地域の境界はなくなるだろうと考えられる。同様に、耕地、労働用具、農機具、その他それらに必要な原材料に関するものはすべて、その不足している集産体の必要に供されるであろう。

二、生産者が多すぎる集産体、あるいはある季節に耕作に適した時期でないために人を使えない集産体は、地区委員会の統制に従って労働の多すぎる集産体で使用する事ができる。

第九点に関する見解——CNT地方委員会の発議で各集産体は、一九三七年二月一日カスベにおける地方会議に集まったが、議事の第九点で一致し、十分な審議の後、この点に関して連盟員の原則に一致する見解を出すための委員会を任命することになっ

た。

一、地区評議会は反ファッショ諸組織から成り、アラゴン防衛地方評議会として知られる資格によって、独立した完全に合法的な機能を有するものである。

a 集産体管理評議会は地域および地区評議会とは独立した機能を有するものである。

b これら両組織の仕事の管理のために人を選ぶよう組合に要請されれば、同一人を選ぶことができる。しかし、これは両者の機能を全く混同してかまわないということではない。

二、小地主が自分の意志で集産体を離れる場合、彼らは集産体から何物を受ける権利もない。彼らは自給自足できると考えられるからである。

a 農村や都市のすべての地所は、騒擾分子の他のすべての財産と同様に、接収の時に存在しかつ集産体が認めた労働者組織が接収することになる。さらに、その時まで所有者によって耕作されないでいた土地や、共同であるいは小作料で所有されていた土地は、すべて集産体によって接収されることになる。

b 集産体から離れている小地主は、彼が独自の努力だけで耕作できる以上の地所を利用することはできない。彼らは新しい社会のいかなる恩恵を受ける権利も与えられないことを通告する。

c 彼らの土地あるいは資格は、集産体制（集産体）においていかなる妨害ももたらさないかぎり、常に保証されるであろうことを承認する。

d 小所有は尊重されるので財産登記はない。所有のエゴイ

人民の土地の産物はすべて彼のためになるとしても、彼のものをそんなにあって取り上げようとするのがいいか悪いかわからない。

アシンが発言を乞うた。彼は仕事で大いに生産を上げている驚くべき活動力のある同志である。彼は非常にエネルギーに熱心な平易な言葉で話した。他の事のついでに言った。「他の委員会の委員が我々の同志の所にきて、なんとかいう自治体にあるなとかいうブルジョアの土地は、この村のものか、他の村のものと絡むという恥知らずな、まるで卑劣なことがあった。この競争は現在我々の時代にはふさわしくない。自治体にあるものはすべてその自治体のものだ。自治体にあるものはその地方のものであり、その地方はスペインのもの、労働者のものであるのと同じである。わしは今すぐそんな問題を取り上げるべきじゃないと思う。根本的で大切なことは、全部の土地を集産化すること、交換を始め、新しい経済を組みたてることだ。このためには、技師や技術者や農業技師が、この土地あるいはあの土地あるいはあの土地に播くべきものを、その生産性によって指示することだ。このバルバストロの土地はぶどうにしかよくないなら、ぶどうを植えよう。小麦なら小麦を植えよう。一人の百姓はどんなに働いても家族や友達の手助けがいるものだ。だから個人主義は無用だと思う。この問題をどう解決してブルジョア的なエゴイズムをなくするか？ 土地を集産化して完全に統制することだ。土地は百姓が耕すべきだ、そして作物は広く全員のためになるべきだ。わしにとっては正義と公平の最高の問題だ。もう貧しい百姓も金持の百姓もないのだ。だったらどうして土地を集産化しないのだ？ 古い鋤や使いものにならない馬具しか知らない百姓

ズムは消滅させられつつあると考えるからである。

e 集産体の評議会のみが所有に関することに従事する。

バルバストロで開かれた

ある農民集会の議事録の抜粋

……無学な百姓の同志スピアが集まっている百姓たちにきいた。

「同志たち、教えてくれ。別々に耕される土地はあんなたちに何をくれるのか？」皆は異議なく答えた。「空腹と苦勞と貧乏だ。」玉ねぎや酒やその他の事についても話した。集会には彼らの苦勞や闘いについての陽気で真面目な考えが出された。スピアは続けた。「百姓がぶどう酒を作っても、安い酒ばかりが飲まれた。万事そうだった。おまけに外国は模範的なぶどう酒をもってきた。集団で働いて、機械を使って、小麦はものすごく安く売れるようになっていく。それなのにここじゃ我々の頑固な個人主義のために百キロ五ペセタ以下では売れないんだ。」

シウの言葉を引用する。シウは一人の小ブルジョアとして大地主からの接収とその即時集産化を主張した。接収した土地を大きな農事試験場にするのを正しい必要なことだと考えた。彼は言う。「百姓は自分たちの間違いに自分で気がつくだろう、そしてゆっくり、休みながら集産体で成長していくにちがいないさ。」

彼は今すぐに絶対的な集産体に進むのは危険だと考えている。スペインは小ブルジョアの国で、この考えを強制しようとすれば、革命の前進にとって致命的な結果を引き起こすだろう。ロシアではどうだったか？ レーニンは新経済政策を始めないでよかったか？ なぜ？ なぜなら百姓は保守的で反動的な観念をもっているの、

がいる。土地が集産化されれば、彼らは機械を持ち、もっと少なく働き、もっと多く収穫するようになるだろう。」

議長のマヴェリヤは総会の意見をまとめようと思って要約した。「百姓は自分の考えで進んでいく者でなければならぬ。住民は集産化を望んでいる。だが我々は誰にも何物も強制したくない。住民に反対してはどんな独断も支持できない。」

集会は満場一致で同意した。マヴェリヤは再び口を開いて言った。「百姓はこの社会化を實行するよう強く要求されている。なぜなら、集産化すべきか否かは我々自身から、我々の確信から出る決定でなければならないからだ。」（ホセ・イ・コスメ・サムベリス、バルバストロ、一九三六年八月二七日——一九三六年九月一日、バルセロナの「ソリダリダッド・オブレラ」に掲載された。）

レバンテ地方の革命

ウィリヤホジョサ（アlicanten）——平常の人口は九千だった。戦争の舞台からの避難がその人口を一万四千に増加させた。すべての大きい村におけると同様、ここにも種々の産業が存在した。しかし支配的なのは漁業で、労働人口の四分の一を占めていた。だが、造船技術者や網職人やこの産業に付随する種々の職業や運輸を計算に入れると、それに従事する労働者人口は四千を数えた。CNTは多数派組織だったが、UGTとの完全な合意にたっていた。

運動が始まって二ヵ月で、漁業労働者は接収とその即時社会化の実施とを決定した。一九三六年九月にこの決定をしたとき、労働者たちは彼らの産業があらゆる設備を欠いていることに気づいた。

バルセロナの「ソリダリダッド・オブレラ」に一九三七年七月に

発表されたM・カルドナ・ロセルの詳しい研究によると、この産業は年とった漁師に年金を与え、戦争に出ている者の家族に手当てを与えていた。同様に、社会化以前に引退していた漁師と、元漁師の未亡人のために補助金と年金が与えられた。この産業は失業回避を担当する自治体会議の経済評議会のために、自発的な税金を要求した。この税金は一カ月の純売上げ金額の千ベセタにつき三パーセントから成っていた。この項目として年二万五千ないし五万ベセタが入った。同産業はその成員と家族の医療および薬剤の業務を行っていた。業務は主治医も専門医も解剖その他においても同様に完全だった。薬剤は特効薬も含めて無料だった。療養中は給料の全額を受けていた。

同産業はその純益のほとんど全部を、危険にさらされている地域の他の産業の補助に振り当てていた。この協力は無償供与あるいは無利子貸与の性格をもっていた。九カ月の期限で総額五〇万ベセタの金額がこの項目として計上された。魚が完全に荷造りされて学校や民軍や軍隊に送られた。自治体の住民への魚の販売は原価で維持された。国家には税金が支払われた。

漁業組合は自治体の経済原則をうちたてた。各漁船の生産は別個に計算されなくて統計の目的でだけ計算された。沢山の魚の山の全体が合計されて、この産業の労働者の全体に割当てられる生産の合計が出された。給与体系は次の通りである。生産高のうち、一般労働者は一定部分、技術者はその一倍半、見習は四分の三に対して権利をもっており、それぞれ五〇・七五、三七・五〇ベセタに相当していた。それでも当時は家族給を定着させようとする意図が広がっていた。

一九三六年九月一日から一九三七年五月終りまでに、魚と種々の原材料の売上げとして五、〇五六、九二四・四〇ベセタが記録された。支出項目（人件費、石油、ガソリン、機械油、保健衛生、恩給、経済評議会、税金その他の費目）として四、三五五、八二七・一八ベセタが記録された。清算残金は七〇一、〇九七・二二ベセタとなった。二〇五、六四九・四〇ベセタが保健衛生と恩給の項目に費され、経済評議会や国庫への税金その他の項目に一、六八〇、〇六二・五〇ベセタが費された。魚の売上げによる五百万ベセタの収入は労働者、学校集団、社会救済事業、前線等へ無料で渡された魚の価格を含まない。

失業は、農民に干魘の被害を償い、失業者をまとめた公共事業を起すことによって克服された。病気による失業者は日当の全額を受けた。六五歳になると強制的な、というよりむしろ時効に従って引退を言い渡された。この充当金は、家族給の確立を待つ間、退職者家族数の増加によって増加した。退職者は漁をし、産物を正当な価格で製造業に売る権利を持っており、ここから釣道具や船を無料で受け取った。

生活費は一日一人当たり大体二ベセタかかることになった。水道、住居、光熱は十分な資力のない住民に無料で供給されているため計算には入っていない。

保健衛生評議会は広い屋敷に置かれていて次の本部をもっていた。救急所、臨床（医薬と外科）診療所、手術室、手術準備室、電気治療室等のある外科と産婦人科の病院。二〇ベッドあり、拡張もできた。X線センター、化学および生物学の解剖室、歯科、獣医科、眼科診療所、各専門科（耳鼻咽喉、消化吸収器官、産婦人科、

梅毒、性病、呼吸循環器、一般外科と重傷外科）があった。専門医は州都から週の一定の日に定期的に、あるいは緊急の場合にやってきた。彼らは社会救済および保健衛生評議会によって賃金を支払われた。

保健衛生事業を利用する権利をもつには、経済力のない場合、保健証が社会救済事業証を提示すればよかった。漁業から紡績業に至るまですべての産業は、毎月相当量の証明書をもらっていた。どの市民住宅も各自の資力に応じた経済的な値段で手に入れることができた。月二五〇ベセタの最低から一〇ベセタの最高まで四種類あった。資力のない家庭は無料でもらった。サービスは常に同じであった。

定額あるいは無料の公共食堂があった。おいしく十分に食べられた。いつも同じとは限らないが、二人の審査員がそこで食べることにになっていた。メニューは二品の料理とデザートと欲しいだけのパン。旅行者も場合によって一日一ベセタか無料を原則として食べることであった。

理髪業者組合もパン職人組合と同じく集産化された。製材業部門もまた総集産化のプランをたてていた。興行は自治体有化された。運輸業はCNT-UGTの大集産体を基礎とし、その全国連盟に従って活動していた。チョコレート工業は重要性では多分第三位だろう。CNTとUGTによって社会化されていた。約一六の工場に配置された二百人くらいの労働者が就業していた。九・五〇、七・五〇、六・五〇ベセタの三種の日当と女子の特別の日当が定められていた。大家族の場合には付加金の交付があった。一日七時間、週四六時間の労働だった。社会救済事業、退職者救済事業、医療事

業等があった。社会救済評議会には一定の分担額を公平に納め、経済評議会には自由意志で納めた。家族給が計画された。農民とはいえば、彼らは土地の集産化が自治体有化かで迷っていた。網用紡績は重要性では第二位だった。約四百人のCNT-UGT労働者が従事していた。その組織は彼らの同僚の漁師の組織から想を得ていた。

セルヴェラ・デル・マエストレ（カスティリオン）——住民五千。乾地農業。産物はオリブ油、はたききょう、すずめのえんどう、ぶどう、穀類。集産体は約八〇家族が構成し、住民広場で公開された集会の決議によって結成された。メンバーの大部分はCNTに属していた。UGTは当時革命的情勢の外にある組織だった。他の労働者グループの責任で接収された農場の統合に関して四つの部門が設けられて各部門の先頭に代表がいた。集産体は二つの理髪店と大工とをみずから有していた。一日の仕事には限度はなく、男子には三・五〇ベセタ、女子には二・五〇ベセタ、未成年者には一・五〇ベセタの俸給が与えられた。生活必需品、衣料その他の品物の販売のための組合がつけられて、域内貨幣によって販売された。

集産体への加入には志願者が自分で所有しているものをすべて供出することが要求された。人をやむをえず搾取するというような非道徳なことは決して起こらなかった。他の集産体との関係は交換を通して行なわれた。織物その他日用品でない物の購買のためにだけ国家の通貨が使われた。集産体員の労働の成果である深い井戸が、全住民を悩ましていた水不足の問題を解消した。その井戸によって集産体の野菜畑の灌漑も行なわれ、必要な野菜を集産体にもたらした。ファランへの野蛮人がこの土地に侵入するまで存続した。

編集後記

天皇もしくは天皇制に対する態度については、かなりはつきりした世代の相違があるようだ。これは戦後教育の思いがけない勝利？ なのだろうか。ヒロヒトを死刑台へ、というきわめて即自的な反応と、天皇(制)なんて戦前派の怨念の標的さ、という吾不関焉とが昭和二桁世代には共存しているようにおもわれる。これは不穏な傾向である。日本という懐の深い社会には、どんな事態が起こってもちゃんと即応できるような引き出しがいくつも用意されてある。それ公害だ、それ科学技術の行き過ぎだと声があがると、すぐそれに応じて「こころ」の長い伝統が持ち出されてくるといった按配だ。大抵のことは自前でこなせるようにできているのだ。この複雑微妙なからくり仕掛が日本文化の特性であり、その

元締めが天皇(制)なのだが、この仕掛の理論的な解明を抜いてしまうと、突き進むにせよ、避けて通るにせよ、まんまとからくり仕掛にからめとられること必定だからである。

このところ、関心がこの問題に集中してしまったので、連載中の「人間における遊戯と労働」にまで手が廻りかねた。御諒承を乞う。

◇

前号で報じたように、昨年夏、グッドマンが死んだ。今号で追悼の小特集を組もうとしたのだが、十分なものにはなりえなかった。片桐、中尾が「グッドマン論義」で述べているように、グッドマンという思想家は、黒白がはつきりしている、疑似論理的、疑似体系的思考に泥んでいるばかりには、うまくとらえ切れないのかもしれない。

片桐ユズルは、これからもグッドマンの文章を逐次訳出してい

くという。その粘り強い努力に期待したい。グッドマンのような生き方、考え方をもつともって吸収する必要がある。

◇

秋山清「恋愛のアナ・ボル論争」を読んで、人間とはちつとも進歩しない動物だなあ、という感想をもった。これは本題には関係ないことなのだが、論争が主題を離れて政治宣伝の場となりみずから出口をつぶしてしまうやり方といい、山川菊栄の恋愛論といい、それに対する高群のそれといい、今日のそれとほとんど変わらぬ。人間とは変わらぬものなのか変わらぬものなのか、そんな議論は所詮、水掛け論に終わる運命しかもたないのだから、しかし、翻って考えて、この点をぎりぎり煮つめてみると、グッドマンのいわゆる「保守的アナキスト」のパラドックスに到達するようにおもわれないでもない。

黒の手帖 第十五号
一九七三年五月二十五日
発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社 東京都新宿区北山伏町三三
(大沢方)郵便番号一六二
振替・東京一〇二四六五
印刷所・株式会社清水印
刷所 東京都新宿区戸塚
町三丁目一五〇

定価・二五〇円

送料七〇円

二号分前納・六〇〇円

四号分前納・一二〇〇円

(いずれも送料共)